

オーブン カレッジ

韓国の食品とこの場合、キムチ、マッコリなどが頭に浮かぶ人が多いのではないかと考える。逆に、「では韓国で一番飲まれているお茶は？」とこのところどうだろうか。この答えはなかなか容易ではない。

日本で「お茶」といって、麦茶やばぶ茶もあるが、多くの場合は「緑茶」である。しかし、韓国の場合には日本の同じく「緑茶」というわけにはいかない。緑茶以外にも麦茶、とうもろこし茶、ゆず茶など「緑茶」の代用茶が多くある。「ゆず茶」に加え、

韓国の緑茶産業

「五味子茶」、「かりん茶」、「ナツメ茶」など様々な種類の「茶」が存在する。日本人の感覚からすると、「ゆず茶はお茶か？」となるが、韓国ではあくまで「茶」なのである。

以下においては、韓国の茶産業、とりわけ緑茶産業についてみていくことにしよう。

日本には言わずと知れた緑茶の産地があるが、韓国にも宝城(ポソン)、河東(ハドン)、済州(チェジュ)といった緑茶の三大産地がある。

それぞれの産地に特徴があるが、宝城は産地のなかでも昔から知られており、韓国人に「緑茶の産地は？」と問うと、真っ先に出てくる産地である。河東は宝城

シフィックには緑茶部門があり、「ソルロク」、「オーソルロク」というブランドで販売されている。この茶葉の産地が済州なのである。産地のうち、宝城や河東では緑茶産業が地域経済、地域の活性化とも密接に結びについている。宝城の場合、緑茶畑を利用したイベントの開催、レジャー施設の運営、学校教育等への利用を行っている。河東の場合においても同様の取組みが進められている。

各産地では緑茶製品の開発も進められているが、日本と異なり、韓国では緑茶の飲用が習慣化していないため、緑茶の成分を利用した製品開発(食用・非食用)が主に進められている。また、オーソルロクやソルロクのように、全国規模の販路を持つ企業がバックにある場合はよいが、宝城や河東のような産地の場合、生産者の規模が小さいことから、販路に課題があるという問題もある。

また、消費側の要因も産地には影響を与えている。緑茶の飲用習慣が少なく、日本の緑茶に相当する位置は麦茶やとうもろこし茶が占めている。そのため、ペットボトルの茶飲料についても、自動販売機や小売店で麦茶やとうもろこし茶を見ることが多いが、緑茶に至っては、取扱いが無い場合も少なくない。そのため、緑茶の飲用をいかに拡大するかが産地の重要な課題となっている。

習慣なく飲用 拡大策が課題



たむら よしひろ

消費者問題論 食料経済論。九州大学大学院生物資源環境科学府博士課程修了、博士(農学)。韓国政府(農村振興庁)、佐賀大学の研究員を経て2011年から現職。1980年生まれ。

名古屋経済大学
経済学部現代経済学科准教授
田村 善弘氏

よりは新しい産地であるが、宝城に次ぐ知名度がある。韓国の小売店で販売されている緑茶関連商品には、「宝城」もしくは「河東」の表示があるものがほとんどである。

では、最後の済州はどうだろうか。こちらは、先の2つの産地よりも新しい産地であるが、他にはないユニークな特徴がある産地である。それは、韓国の大手化粧品メーカーのアモーレパシフィックの茶園があるということである。アモーレパ

